



Title	自閉児教育における水泳指導に関する研究
Author(s)	原下, 秀男
Citation	情緒障害教育研究紀要, 2: 65-68
Issue Date	1983-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8939">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8939</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

# 自閉児教育における水泳指導に関する研究

原 下 秀 男 \*

## 1. はじめに

水泳は、全身運動として、身体の調和的発達に適した運動として広く行なわれている。近年、脳性まひ児、小児気管支喘息児水泳をはじめとして、心身障害児水泳が各地で試みられている。佐々木は、「自閉児の本質は脳の機能的、器質的障害と捉え、この障害を克服するためには全身運動を中心として脳機能の統合をはかる治療や知覚の統合＝認知能力をはかる治療が必要である」<sup>1)</sup> という。本研究は前者の全身運動を中心とした治療として、自閉児に対する水泳訓練が、どこで、どのように行われているかを明らかにし、自閉児教育発展の手がかりを得ようとするものである。

## 2. 方 法

### (1) 学校実態調査

この調査は、情緒障害児学級（小学校）49校を対象として実施した。調査方法として、質問紙法の自由記述式とし、学校教育現場の教師の生の声を集録するように配慮した。期日は1982年11月6日現在の状況によって回答を依頼したものである。

### (2) 各地の事例調査

自閉児水泳訓練の先進地として経験の積まれている愛知県春日井市NASスイムスクール・サンマルシェ、大阪市身障者スポーツセンター、神奈川県藤沢市YMCAスイミングスクール、大和市大和学園スイミングスクール、北海道江別市ピッコロサークル、旭川市東急イン・アスレチックを対象とした。調査方法は、指導実際の現況を視察して、水泳指導員、運営関係者から取材したものである。期日は、愛知、大阪、神奈川の事例は、1982年8月1日から8月8日までの自閉児水泳訓練日とした。北海道江別の事例は、1982年5月14、15、16日の3日間行われた全道水泳指導員研修会員として参加研修したものである。旭川市の事例は、1982年12月12日に当地の自閉児水泳の先鞭をつけた水泳指導員と児童の母親による座談会を中心にまとめたものである。

## 3. 結果と考察

### (1) 情緒障害児学級（小学校）の実態

自由記述式質問紙法による回答率は57%（28校）である。この調査によって、自閉的傾向、自閉症児219名に

ついで資料を得ることができた。

### 1) プール施設の現状

情緒障害児学級の設置校におけるプール保有状況は65%であり、規模では、25メートルプールが88%であるが、そのうちで幼児プールが併設されているのは12%、屋根付きプールは65%である。約1/3の学校が、プールの早期設立を望んでおり、とくに夏季の短い本道におけるプール条件として屋根付き温水プールの要望が多く出されている。

### 2) 指導時数

水泳指導を行っている学校は85%であり、積極的な取り組みが見られる。中には、プールがないので、海水浴を積極的に実施している学校もある。指導時数については、各校に差が見られ最低3時間から最高106時間まであり、各校の平均時数は約21時間である。指導時数の過不足については、適当であると答えた学校は47%、過半数がもっと指導すべきであるとしている。106時間指導している学校が不足であると答えているが、ロンドンの自閉児学校イーリングでは毎日45分ずつ水泳訓練の時間に当てているのに比べてみると情緒学級の水泳訓練の時数が不足であることは明らかである。

### 3) 児童の水に接する態度

陸上の水に関わる態度では、水いじり、水遊びをたいへん好む72%（185名中133名）であり、「やることがないと、水道の蛇口から出る水の感触を楽しむ」「池や川に腰まで入る」「水に固執し寒いときでも唇を紫にしながらも水遊びを続ける」など水に対しての固執行動が示されている。他の28%は、「水を極端にいやがる」10%、「無関心」18%である。プール内の行動では、プール遊びをたいへん好む67%（204名中136名）で、他33%が「プール遊びをきらう、無関心」である。「プール内での水遊びをたいへん好むグループ」の水慣れの様子は、「水中にもぐったり浮いたりできる」49%（136名中66名）、「水中に顔つけはできないがプール遊びを楽しむ」51%であった。

この結果から「プール内での水遊びをたいへん好む児童」のほとんどがプール内で水を素材とした学習活動に参加していることが明らかである。つぎに、「プール内での水遊びをきらう、無関心グループ」の反応について調べた結果「プールに入らない。入ってもすぐ上がってしまう」82%、他18%は水に関心を示さない児童である。この調査から、児童の水に対する接し方は3段階に分か

\* 北海道教育大学旭川分校情緒障害教育教員養成課程

れていると考えられる。A段階は「もぐったり、浮くことができている層」B段階は「プールで水遊びができる層」C段階は「水の拒否、無関心層」であって、それぞれの層が、全体の約1/3ぐらいとしてとらえることができる。このような児童の実態や個々の発達段階を的確にとらえた適切な指導法の工夫が必要であろう。

#### 4) 水泳指導の評価と展望

以上、質問紙調査結果の要点を述べたが、教師の自閉児水泳経験から効果的であったと思われることについて、つぎのような回答がよせられている。

- ・水に対して拒否反応を示していた子どもも、繰り返しの指導で入るようになってきた。
- ・水に親しみ、水慣れという面で効果的であった。
- ・水中における安全泳法が身についた。
- ・自閉児は、遊びや運動量が少ないので水中でよく体を動かすのでよいと思う。
- ・十分体を動かした後に、落ち着いている感じは、よく経験する。
- ・集団行動で指示に従う面が見えてきており、たんに水泳だけでなく他の面でも、当初水を恐れた児童も種々の場と回数で全体行動に従ってきている。
- ・子どもどうし手をつなぐ、体に触れ合う、しがみつくといった人との触れ合いがよくなった面もある。
- ・教師の背中につかまって足をばたつかせるなど、対教師のかかわりを多く持つようになった。
- ・他の子どもの動作に関心を示し、近づき一緒に遊ぶ子どもたちが多くなった。
- ・「プール、およぐ、シャワー、たいそう」の言葉を表出し意味が理解できた。
- ・「つめたい、いやだ、キャーッ、ダメ」といった発声なり、言葉が出るなど役立つ面がある。
- ・水泳というより水の中で身体を動かすこと自体が、このような障害を持った子にとっていい経験になると考えている。泳げるようにということはあまり意識せずに水に慣れ十分に楽しく身体を動かせる場にしたい。
- ・子どもたちが喜んで行うスポーツや運動の少ない中で水泳はとても貴重なものと思われる。できれば泳ぐ回数を大いに多くしたいと思う。とくに自閉児のばあい身体を自由にスムーズに動かすことができず、すべての点でぎこちなさが目立つ。この一つの原因にもなっていると思われるのが適切な筋緊張のコントロールがむずかしく、とくに力を抜くことができない。力を抜く、力を入れるなどの調整能力を習得することはとても大切なものだ。そのてん水泳は抗動運動を行うのには非常に有利な条件を備えている。この点を利用してスムーズな身体運動をすこしでも可能にするように水泳指導を大いにとり入れてみたいと思う。
- ・情緒障害児のため一人で指導することは不可能であり

精薄学級と合同で実施している。児童6名に教師2名で対応しているが、それでも常に不安がある。

- ・環境（人的、物的、経営的）が整備されたら長期的継続的指導が必要になってくる。家庭との協力が大きな力となってくれる。なかなか困難なことと思うが良好な環境の中で根気よく指導していけば、きっと良い結果が出てくると思われる。
- ・残念ながら、海のそばということかどうか、本市のプール施設はきわめて条件が悪く設置についても、これまでも現在も要請している。

上記の記述は現場教師の生の声であり、水泳実践の中で確かめられた貴重な体験である。回答のすべてが何らかの有効性を述べ否定的なものは見当らなかった。水慣れの面では、当初水に対して恐怖心、拒否反応を示しながらも、反復訓練で水慣れし水中運動として効果的であると述べている。各学校の回答で共通していることは、水泳技能の向上より、むしろ、自閉児の不応行動の改善面での効果を強調している点である。水中運動を十分に行ったあとの行動面で落ち着きがみられ、以前は教室からよくとび出した子どもが、水泳指導を通して集団行動の指示に従えるようになり、教師の指示が聞き分けられるようになった例も多く、自閉児水泳が適応障害の治癒に有効であると考えられる。対人関係の改善面では、対教師との肌と肌のふれあいや、多くの語りかけによるマンツーマン指導により、徹底的に受容しサポート形成の段階をあせらずに行うことが、良い結果になって表われてくると思われる。

筆者の経験によると、初対面でマンツーマン指導をした子どもに面かぶりの訓練を徹底して行っていたら、突然「おもしろい!!」と言ったのでびっくりしたことがある。この子は、水が好きで、いつももぐってばかりいたが、面かぶりで前進することに心の充足感を覚え喜びの声を出したのではないかと思う。本年指導した子どもは水中でのバタ足が3回目の訓練でできるようになり腰が浮きビート板で前進することがわかったとたんに、「自分で、自分で……」と言いながら、バタ足に力を入れて非常に意欲的な表情を見せたのである。ローナーウイングが、「水泳に対する反応は自閉症児にとってさまざまですが、いずれにしても子どもたちが自信をもつようになると指示に従うようになります<sup>2)</sup>」と述べていることがうなづけるのである。

#### (2) 各地の実践事例

##### 1) 愛知県春日井N A Sスイムスクール・サンマルシェ

ここでは1976年より脳性まひ児の水泳、1978年自閉児水泳に着手している。プール訓練の対象は、愛知県心身障害者コロニーの病院、施設、養護学校などにかよっている学齢期前後の心身障害児で、このコロニー近くに

開設された温水プールを附設するスポーツクラブN A S スイムスクールに依頼し障害児のプール教室がひらかれた。この教室の特色は、医師、体育生理学者、理学療法士、養護学校教師ならびに水泳コーチがチームを結成しており恵まれた地域社会資源のなかで専門家の熱意と協力によって、運営されているものといえる。毎日曜日脳性まひ児30名、自閉症児40名の水泳訓練が行われている。本グループによって昨年9月わが国で最初の障害児水泳の指導書『脳性まひ児の水泳』<sup>3)</sup>が出版された。1981年には日本水泳連盟主催第3回水泳科学研究会のメイン会場となり、これまでの実践にもとづいてきた心身障害児の水泳指導に関する提言をしている。

#### 2) 大阪市身体障害者スポーツセンター

##### 大阪市身体障害者スポーツセンター

大阪市が1974年在宅の身体障害者が家族ぐるみで利用できる総合スポーツセンター施設として開館。その後、1981年重度障害者がさらに使いやすい施設を増設し、障害をもつ誰もが、いつでも利用できるように運営している。開館以来100万人を突破し、世界一の身体障害者スポーツセンターとして多くの参観者が来ている。利用者は、それぞれの施設でセンターの指導員から指導を受けることができる。プールの利用状況では、1981年度47,881人で、全施設利用の42%を占めている。

「1975年情緒障害児とその母親を対象とした水泳指導実施。目的は、たんに泳ぎをマスターするのみでなく、水と親しみ、水と遊びながら閉ざされがちである彼らの心の窓を開いていくといった心理療法、遊戯療法としての水泳である。1978年、情緒障害児100名の水泳指導を実施、2期に分け、指導員4名、学生アルバイト14名のスタッフで能力別に、時間にして7時間の教室である。マンツーマン指導で効果をあげているが、顔つけない子どもの上達に時間がかかるという。1979年情緒障害児小・中学生55名の水泳指導実施。指導スタッフは、センター指導員、補助員として、OT、PT養成学校、体育大学、養護教育系大学の学生でマンツーマン方式の指導をすすめている。1981年ちえ遅れ、情緒障害、CPなどの障害児とその母親を対象とした親子グループの育成をねらった水泳指導実施」<sup>4)</sup>、ここでは先進的な行政施策、恵まれた施設、指導員によって運営されている。

#### 3) 神奈川県藤沢市藤沢Y M C A障害児水泳

人間の生命を大切に、健康と身体をつくり保持する体育活動を展開するY M C Aでは、水泳、サッカー、野球などをとおして健康な心と体づくりに励んでいる。対象児は年間に22,331人もいる。すべての人に体育を、という精神で情緒障害児に対しては、1977年より始まり、自閉児50名が特別クラスで指導を受け、集団行動に適応した段階で健常児グループに入れるようにしており、23名が健常児グループに入っている。

#### 4) 神奈川県大和市大和学園スイミングスクール

健常児スイミングスクールであったが、あるヘッドコーチの熱意で心身障害児水泳の道が開かれた。彼は、学生時代ボランティア活動で自閉児水泳指導をした経験を生かし、特別コースということで理事者を説得したのである。開設は1979年で、各コースは、(1)情緒障害児及び発達遅滞児コース (2)脳性まひ児コース (3)喘息児のコース (4)障害を持つ赤ちゃんコースである。

1981年、第1回全国心身障害児の水泳指導研究会を本グループで行い、荒井は、「1981年は国際障害者年で、一人一人が心身障害についての考え方を見直し真剣に取り組んでいこうではないかと考え、当スクールでは、水泳指導員の立場から指導方法の確立を目標にして研究をすすめている。協調性、積極性、適応能力に欠ける子どもや、体力面で定期コースの練習について行けない子どもたちのために特別コースを設置し、練習を行っている。特別コースは定期コースの練習について行けるまでの前段階と考え、精神面、体力面、水泳能力面で定期コースの練習が可能だと判断した子どもたちは、積極的にコース変更をすすめている。普通児と心身障害児が定期コースの中でともに練習でき、互いに成長し合うことをスクールの基本方針として行ってきた」<sup>5)</sup>と述べている。子どもを道連れに心中を考えたこともあったという母親が水泳指導員との交流でぐんぐん明るくなっていったのは、このスクールの指導員の熱意と努力はもとより、暖かい心があったからであった。

#### 5) 北海道江別市ピッコロサークル

1980年肢体不自由児、精神発達遅滞児、自閉児の父母がピッコロサークルを結成し、江別市江泳会の指導部に指導を依頼した。理事会では、事故のこと、症状に対しての認識がないこと、水泳による治療効果が決定的であるという根拠のないこと、指導技術面の問題をかかえたが、水泳をとおしてともに歩むことができるのならやってみようということで開始されたのである。翌年には、一斉指導にきりかえる。一斉に平浮きキックで進むのに2カ月が経過した。

「集中力がつき規律を理解したのだ。なかまと一緒に練習しているのだと意識しだしたのだと思いたい。とても小さな積み重ねだけど、一步一步泣き笑いのひとりひとりを大切にしながら手さぐりで歩いている。事故のないことに感謝し、水泳がこの子らの生きる一つのかてとなつて少しでも役立ち、泳げないまでも身の安全を守るすべを修得してくれたら、又一つ夢がかなえられる。」<sup>6)</sup>と指導員は述べている。

#### 6) 北海道旭川市東急イン・アスレチック

旭川市における自閉児水泳は1977年に母親3人を中心に始められた。わが子の障害を治療する方法はないのだろうか、ありとあらゆるところの門をたたいたが答え

は何ひとつ返ってこなかったという。ある母親は、当時をふり返ってつぎのように話している。「9月に旭川で初めてアスレチック温水プールができました。夜、主人が毎日のようにT男を連れてプールに行きました。主人が水泳に力を入れたのは、全身運動が発達にとってもいいという信念を持っていたようでした。赤ちゃんを風呂に入れると、ほんとうに幸せな顔をしているので水の嫌いな子どもは絶対にいないと思った。好きなものから指導して、それによって会得できるものは何かを考えた時水泳じゃないかと思ったのです。それに、この子もみんなと同じように泳がせてやりたいという親心もありました。」

又、ある母親は、「M男は水に対して非常に恐ろしかったです。T君とはぜんぜんちがうのです。そんなM男といっしょにできたことは、バタ足の練習と浅いプールでしゃがんでピョンピョン浮くことです。これにM男が興味を持ってきて親子で熱中したんです。しかし、こんな練習でいいのか不安でした。それで、アスレチックの指導員にお願いしました。T先生は、M男の心をしっかりつかみ、あれほど水に顔がつけられなかったのが2か月でつけられるようになったのです。それからのM男は学校でのプール学習は得意になったのです。恐ろしい水となかよしになり安心して参加できるようになりました。アスレチックの先生方に感謝しています。」

当時のようすをT指導員はつぎのように語った。「私たちは相談を受けた時には、深く考えることもなしに簡単な気持ちで引き受けました。自閉児の知識もなかったし、今考えてみればお母さん方の熱意が伝わったんですね。指導の要領がわからないので普通児のスクールと同じシステムでやるしかない。初期の頃は混乱状態でしたよ。」ある母親は、「T先生は、何もわからないので普通の子どもと同じ指導をします。と言ってくれましたが、親として一番ありがたいと思いました。その発想が現在まで指導の中で続いてきたんだと思います。特別な目で見られていたら、それだけのことしかできなかつたと思います。特別な子だから普通の子どもと同じ育て方が大切なのだと思います。」と言う。

翌1978年には、2期生として10数名受け入れてテストケースとして本格的な訓練に入った。当時の指導の様子を8ミリで再現してみると母親といっしょのグループ指導やマンツーマン方式の指導を工夫し楽しませながら水

慣れさせる指導法は素晴らしいものである。T指導員は「経験から工夫したんですよ。」と言う。そして、子どもたちは確実に一步一步成長の歩みを刻んでいるのである。

#### 4. おわりに

自閉児教育に水泳が非常に有効であることは明らかである。ここに紹介したのは、わが国における先進の実例である。問題はいかにしてあらゆる地域、学校で与えられた条件を改善しつつ、有効な指導を行うかである。事例調査のなかから得られたことは、「自閉児の親に水泳指導の意義を知ってもらい、直接的、間接的に協力を得ること」、「教師が地域の協力可能な人々との連携をはかりつつ水泳指導の方法を身につけること」、「水泳指導の環境を整備するため地域、学校の協力を得ること」などが重要と考えられる。

佐々木<sup>1)</sup>は、「将来リハビリテーションへの見通しの明るい症例のほとんどが、幼児期から一貫して健常児の集団で保育や教育を受けているうえに、地域内の種々の青少年対象の体育施設などで特別な配慮を受けながら、インテグレーションやノーマリゼーションのアイデアによるケアやサービスを継続的に得てきている。」と述べている。したがって、すべての心身障害児に運動の機会をあたえるために環境、指導体制の整備が急務であると考えるのである。

本研究をすすめるにあたり、旭川市の太田さん、宮本さんのお母さん、旭川アスレチックイーストの田中仁美係長をはじめ事例研究のため各地でお世話になったスイミングスクールの指導員や関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

#### 文 献

- 1) 佐々木正美：自閉症児の学習指導，1980.
- 2) シビル＝エルガー，ローナー＝ウィング：自閉症児の教育，1975.
- 3) 矢部京之助，高松潤子，河村光俊，共著：脳性まひ児の水泳，1982.
- 4) 大阪市身体障害者スポーツセンター：研究紀要，1976～1981.
- 5) 荒井三千雄，加納恭子：心身障害児の水泳指導，1981.
- 6) 北海道水泳指導員会：しぶき，第12号，1982.